

坂の上の楓たち

(その4)



 市川二中同窓会
再発足20周年記念誌
2017

その4の目次

*会報 11号から15号の抜粋

2009年から2015年の概略(下段)

- ・「市川二中五十年史」発刊に想う
五十年史編集委員長 1期 山田 齊
- ・市川二中へ入学できての感謝・思い出 21期 田中 澄子
- ・カーペンターズが流れていた頃 25期 栗本 拓彦
- ・強烈に脳裏に焼きつく数々の
感動・大切な仲間・ハーモニー・宝物 40期 大作美由紀



・二中の思い出 51期 孫 逸舒

*会報 16号から20号の抜粋

2014年から2017年の概略(下段)

- *同窓会ホームページがオープン
- *村上正治・生誕100年記念コンサートに寄せて
- *2015年度同窓会総会ご案内
- *二中PTA バレーボール部 市川大会V2達成
- *先輩後輩 土子大輔さん(47期)(千葉ホークス所属)



懐かしの二中展開催

平成20年6月15日(日)の同窓会総会当日、体育館の後方に特設会場を設け、平成19年の中国中学生との交流活動報告「桑村益夫理事(1期)と同様、懐かしの二中展が開催されました。

プロジェクトチームで選定『市川二十五年史』発刊の協力で収集された資料が中心。保管されていた山田尚美理事(5期)がリーダーとなつてプロジェクトを組み、多くの物の中から選りすぐりを展示しました。

パネルボード6枚、テーブル6台に工夫を重ねた方法で提示されました。

二草創の姿を様々な形でパネル3枚に亘り、昭和20年代の須和岡周辺の航空写真や校舎(兵舎)見取図、年表、歴代校長先生の写真などを、また前のテーブルでは、昭和23年から30年に



参加者からは「当時を思い出した」学校生活が懐かしい二楽しかった」など好評を得ました。

総会終了後は、パネルのみ約1週間、職員室前の廊下に展示され、先生方と在校生にも観ていただき、また須和田祭、一期同期会(11月23日)でも展示されました。

(16期齋藤康記)

発行された「玉藻」を始め「すわだ」「二中新聞」「二中PTA新聞」などが並びました。

懐かしい品物もその他のパネルやテーブルには生徒数の推移表や校章・バッチ、校歌のオリジナル楽譜などが、また鹿倉学級校舎(養護学校の前身、運動會、修学旅行他の写真なども展示されました。



鹿倉先生(中央)を囲んだ同窓生

市川市立第二中学校 同窓会会報

第12号 平成21年3月31日発行
市川市立第二中学校 同窓会事務局
〒272-0825 市川市須和田2-34-1
市川市立第二中学校内
受付は郵便物のみ
編集 会報委員会

世の中の出来事は全て歴史と言える。『市川二十五年史』(1997)年発行してから既に10年が過ぎた。地球史、世界史、日本史、人にも自分史があるように、学校にも歴史がある。それはやがて伝統となり校風となり語り継がれてゆく。昭和20(1945)年8月15日、昭和天皇の玉音放送によって太平洋戦争の終結が告げられ、この時の国民学校(現在の小学校)5年生が我々、新制中学1期生である。

日本の歴史上幾多の改革はあったが降伏による大変革は初めてで全ての価値観が逆転し、民主主義になり明治以来の社会制度、学校制度をも根底から覆すものであった。

その激動の中、昭和22(1947)年新制中学校、市川市立第二中学校は創立され、真間小坂校舎で授業が始まった。翌23年、須和田丘に新築された新校舎には「TCHIKAWA-SCHOOL-MIDDLE-SCHOOL」と横文字の看板がかかっていた。……そして昨年、60周年を迎えた。

40周年(昭和62年)を迎えた時、周年行事について学校側から話があり、菅原校長(12代)とお目にかかり同窓会も協力して欲しいとお話があったが、当時休職状態の同窓会は組織的対応が適わず残念ながら行事に関わることは出来なかった。

その頃、母校に創立からの纏まった記録が全くないことを知り、来るべき50周年には我が市川二中の歴史を残すべしとの念を一入深くした。機運も徐々に高まり結束の強い1期生を中心に他の期の卒業生にも呼び掛けを始め、平成2年第一期の委員会を開いた。その後飯島校長(15代)からも記念誌は学校としても是非残したいとの希望があり、市川二中50周年を忠実に後世に伝える「という基本方針を掲げ、如何にして記録を収集するか、から始まり少しずつ全校の態勢を整え始めた。平成5年PTAも50周年記念事業積立金を予算化、全校態勢が整うことになった。当時はまだ1期生さえ現役の社会人なので、年々、3回資料を持ち寄って話し合い、次のスケジュー



から既に10年が過ぎた。地球史、世界史、日本史、人にも自分史があるように、学校にも歴史がある。それはやがて伝統となり校風となり語り継がれてゆく。昭和20(1945)年8月15日、昭和天皇の玉音放送によって太平洋戦争の終結が告げられ、この時の国民学校(現在の小学校)5年生が我々、新制中学1期生である。

『市川二十五年史』発刊に想う



1ルや得意分野の担当を決める程度の状態を数年繰り返した。年史のコンセプト、資料の収集、卒業生名簿の収集、資金調達、組織の拡充、などなど全てがゼロからの出発で堂堂巡りすることもしばしばであった。

タイムリミットも近づき平成7年、具体的行動に移るため編集委員会、名簿委員会を分けて担当を決めた。8年には財源確保のため賛助金の募集を始める。旧職員・卒業生・父母の惜しみない支援で多大な賛助金を得、資金面の目処もつてきた。

あとは年史の完成に邁進。最終的な執筆は1期4名、3期1名、5期1名が当たり、9年の夏から猛暑を押しつけて最後の追込み。週2回のペースで10月発刊を目指した。出版社「二穂社」古谷先社長の骨身を惜しまぬご指導ご鞭撻の賜物もあり完成した。

当初20名弱で発足した委員会も最終的には1期から30期代に及び約90名ほどが名を連ね、資料・写真の提供者、寄稿者も先生方を含め70名を上回った。多くの方々の協力によってこのプロジェクトが達成され、さらには同窓会の再発足へと繋がった。

みな素人集団で先行きが心配されたが、為せばなる貴重な経験だった。

五十年史以降は後輩の諸兄姉の補綴に期待する。

市川二十五年史

★発行日	平成9(1997)年11月7日
★発行部数	85部、220頁
★発行部数	1,200部
★発行部数	総額約487万円(939名)
★発行部数	賛助金協力1人3,000円以上協力者に感謝1冊贈呈
★費用	出版360万円
★費用	発送費等諸経費 約80万円
★費用	賛助金残高 約45万円
★同窓会移管	「五十年史」残部230部
★同窓会移管	再発足の同窓会に移管

五十年史編集委員長 山田 齊(1期)

この年の活動方針で「会員名簿」の充実とともに「クラス会や同期会」開催への援助活動の強化が確認され、積極的な支援活動の結果、前後の3年間で15の期が同期会を開催している。こうした活動と相まって賛助金協力者は、同3年間で延べ1,200人を超した。

開催した同期会会場の募金は、9の期で195,000円。これら全体で賛助金は3,150,000円を越した。活発な同窓会活動を反映して、総会返信はがきや賛助金払込用紙の通信欄を使った会員通信は飛躍的に伸び、この結果、『会報14号』は臨時に2ページ増の14ページ建てとなった。

アトラクション「松岡厚子(12期)社中「日本舞踊」

10(H22)年6月13日 再発足第13回総会 開催

(会長)三村武教 副会長:松田恵子・柿本正子・鈴木尚賢・安藤達夫 会計:井料京子・武井喜美子
右記以外の理事15名を選出 会計監査:吉田和雄・加藤重夫
アトラクション「武藤修次(7期)「マジックショー」 柿本正子(8期)ほか「よさこい鳴子おどり」

11(H23)年6月12日 再発足第14回総会 開催

(会長)三村武教 副会長:松田恵子・柿本正子・鈴木尚賢・安藤達夫・齋藤康 会計:井料京子・武井喜美子
右記以外の理事13名を選出 会計監査:吉田和雄・加藤重夫
講演「安藤達夫(16期)「人工光による野菜工場(日本から世界へ)」

12(H24)年6月10日 再発足第15回総会 開催

会員の所在確認を精力的に進めてきた結果、判明率がこの年初めて50%を超した(所在地確認の活動が開始された2003年は31%であった)。

かねてより準備を進めてきた同窓会独自の「ホームページ」を開設した。このホームページは「二中ホームページ」と相互リンクされており、いずれからのアクセスも可能となっている。

『会報15号』から16ページ建てとなり、半分の8ページがカラー印刷となり、現在に続いている。

講演「館野純生(15期)「慢性腎臓病に ついて」

13(H25)年6月2日 再発足第16回総会 開催

(会長)三村武教 副会長:松田恵子・柿本正子・鈴木尚賢・安藤達夫・齋藤康

みなさんは今、どんな音を感じていますか。私達の生活には音が欠かせません。風の吹く音、虫の鳴く声、人の話し声、テレビから流れる音楽、どんな音も私達には聞き慣れた音です。しかし、そんな身近に感じられる音が無くなった、どうでしょう。私達は耳から情報を得ることができなくなってしまいます。

日本には聴覚障害者と言われる、聴覚を失ってしまった人達が、およそ二十七万六千人います。私の両親も生まれてまもなく大病を患い、耳が不自由になってしまいました。祖母の話によると、一歳の頃から早くもろう学校に通って言葉の勉強を始めたそうです。耳で覚えることの出来ない分、色々なものを實際に見て、補聴器を使いながら発音の勉強をしたのです。障害者というのは、健常者にたやすいことでも、大変な努力が必要なのです。

健常者は、障害者に対して差別や偏見の壁を作ってしまう。なぜなら、健常者には障害を持つた人達の苦勞や努力もわからず、差別される悲しみを知らないからです。もちろん、それは障害を持っている人にしかわからないことであり、一番身近にいる私でさえ、本当の気持ちを理解することは難しいことです。だからこそ、私は健常者に本当の障害とは何なのか、理解してもらいたいと思っています。

私は生まれたときから、耳の不自由な両親に育てられました。周りの人からは、そんな家庭で育った私をみじめだとか、可哀想だとか、或いはそれ以上のことを思われているかも知れません。家族全員が不自由だと思われたこともありましたが、そんな家庭で育ったからこそ、健

心の音を感じて 伊藤 恵理(60期)

この作品は、伊藤恵理さんが3年在学時に書かれ、「平成20年度市川市学芸賞」「千葉県人権作文コンテスト最優秀賞」「全国中学生人権作文コンテスト・日本放送協会会長賞」を受賞されました。

は親が耳が不自由であることに、疑問や不満を持っていました。何で私だけが普通に親と話すことができないのか、悔しく思ったこともありました。他の皆と同じように話したい、そう思っていました。それは、私自身、障害を持つ人に対して壁をつくるようにしていたからなのかも知れません。

聴覚障害者は、見かけだけでは障害を持っていないことに気づいてもらえません。そのため、他人に道を聞かれることもしばしばあります。耳の不自由な人は、道を尋ねてきた人が何を言っているのかさえ理解できません。尋ねてきた

常者との壁を感じることはありません。家族で電車に乗ったときのことです。父と母はお互いに手話を使って会話をしていました。私は普段、普通に話すのと手話を交えて会話をしています。私にとって手話を使うのは、日常茶飯事のことです。でも、そうでない人達にとっては全く馴染みの無いことなのでしょう。周囲の人達は、私達が手話で話している様子を見かねて、ひそひそと隣のひとと話す人もいました。私はその時、「手話で話すのは止めて」と両親に言っていました。私も実際、幼いとき

人は、そのとき初めて障害があることに気づくのです。人によっては、メモを使って話をしてくれる人もいますが、言っていることを理解できないせいで、イライラされることもあります。社会には、障害を理解してくれる人と、そうでない人がいます。障害者にとって一番の障害とは、健常者に理解してもらえず、うまくコミュニケーションがとれないことです。自分が持つ障害よりも、健常者との交流を深めることの方が、障害者には難しいのです。

身体や知的に障害を持つ人達は、現在でも教育や就職に不利になっています。どんな障害を持っていないかと、その人なりの努力をしなければ、可能性は無限にあるはずなんです。私の両親も、健常者としての交流を深めるため、父は画家として活動をし、母は手話サークルを開いています。そんな両親を持ったことには、誇りを感じています。

障害者には障害を乗り越えるための努力や苦勞があります。でも苦勞だけではなく、自分のできる最大限の努力や苦勞があります。でも苦勞だけではなく、自分のできる最大限の努力や苦勞があります。



杉並公会堂にて



山崎直子さんと私



会報13号(2010) 桑村益夫氏(1期) 『二中校歌CD「須和田が丘」誕生記』より ※ジャケット写真(2009年制作)

おつかれさま “大きなのっぽの古時計”

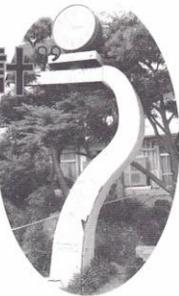
昭和50年(75年)4月以降に入学された方々にはお馴染みの、二中玄関前の校庭にあった時計台が撤去されました。

この時計台は、昭和50年3月14日の卒業記念として、PTAから贈呈されたものです。

デザインは当時、美術科を担当されていた石橋正秋先生で、時計台の白塗りの台は、二中の二をシンボルとしたものです。

37年間、時を刻み続けてきましたが、平成23年3月11日の東日本大震災の影響で、下部に亀裂が出来てしまい、その後も亀裂は日に日に広がり、業者にも修理が危険な状態。修復不可能で報告されました。このため、生徒の安全第一を考慮、同年5月27日、電源を切った午後3時5分を刻んだ状態で倒され、解体されました。

(出典)市川二中五十年史
二中学校だより「須和田が丘」(23年6月2日発行)



会報15号(2012)より

おことわり

・本誌中の寄稿・投稿は、締め切りの関係で2016年に書かれています。このためほぼ1年間のずれが生じておりますことをご承知願います。

・復刊1号から20号までの会報抜粋記事などでは、発行年を基準に文章が書かれておりますことをご了承ください。

会計:伊藤あい子・武井喜美子
右記以外の理事13名を選出 会計監査:吉田和雄・加藤重夫
講演II 粟生明(14期)「せんくう館の設計思想」

※この項は57頁に続く



篠崎實さん(前会長) 追悼

篠崎實君を偲んで 吉田 和雄(2期)

通夜の会場の片隅に、君の笑顔一杯の写真アルバムや愛用品の数々が並べられていた中に、直前まで使っていた手帳があった。その見開きは当月のもの、当日以降仕事のスケジュールがまだ残っていたのに、遊って仕舞うなんて、真面目で几帳面な君らしくないよ……

「二十五十年史」発行が切っ掛けとなって、同窓会の復活が実現し、初代森村会長から2代目の会長に君が就き、組織的な活動企画や実践に、持

ち前のコンサルタント能力を充分に發揮し、多くの委員会運営に尽力された事、役員の一員として感謝の念で一杯です。今年の同窓会総会(平成22年度)終了後に君の参りまで出席した同期生6人、市川駅前前の産でささやかな同期会を開き、楽しい思い出話にひたり、来年も又一緒に約束していたのに……人は生を受けその終りまでに、他の人になんか世間になんか恩返しをしないといけないと

合掌

学習支援 “ア・ゴ・ダ・ス・ヨ”

柿本 正子(8期)

昨年11月、突然逝去された前会長の篠崎實氏が、6月16日「二中タイム」で行なった講演に、三村武教会長と参加しました。今回で3回目でしたが、最後となってしまいました。毎回、珠の世代の1年生向けに先輩講師として、学校生活を楽しく過ごすためのコミュニケーションの取り方や、話し方の内容でした。まず重要なのは「挨拶」であり、挨拶の字は心を開く、摺の字は相手に迫る意味がある事。あは明るく、いは何時も、さは先に、つは続けるよう心

掛けましょう。更に温ったか言葉として「アゴダスヨ」を説きました。アはありがどう、ゴはごめんない、ダは大丈夫、スはすみません、ヨは良かったですなれ……と分かり易い説明とシヨクで、楽しく学べた時間でした。生徒の席の中に入り、対話のような話し方が印象に残りました。篠崎さんの言葉は、必ずや生徒に伝わったことでしょう。篠崎さん！ 本当にありがとうございませぬ。謹んでご冥福をお祈り致します。



市川二中へ入学できての感謝・思い出

21期 田中 澄子

私は昭和四十五年三月卒業の二十一期生です。生まれ育ったのは市川市北方で、中山小学校卒業ですが、家庭の事情で六年生の時に須和田へ引越し、二中に入学した頃は友達ができずにいた私を担当の山下登美子先生が心配してくださり、一年間でしたが大変お世話になりました。

体育顧問の山下先生の授業参観でバレーボールをした時、母が見に来たことをきっかけにバレー部へ入部させてもらい、運動の苦手な私はボール拾いをしながらも卒業まで続けることができました。そんなことから高校では年中行事のマラソン大会に興味を持つようになり、今では市のマラソン大会に参加しています。振り返ると、消極的だった私がさまざまな行事に自ら行動するようになったのも、山下先生との出会いのお陰であると感謝しています。

先生とは数年前にお会いすることができましたが、二、三年前に亡くなられたと娘さんからお手紙を頂きました。お墓にも連れて行って頂いたことで、娘さんとのつながりが続いています。私の住まいから近く、今でもお墓参りは欠かしていません。須和田にある親戚の家を訪ねた時には、二中周辺や須和田公園を散歩したりします。校庭の石段を見たり、養護学校脇の淋しい細道を歩いたりすると思いがよみがえってきます。

二中卒業後しばらくは犬の散歩を兼ねて、校庭のクラブ活動を見に行ったりしていましたが、クラブでお世話になった先輩が、やはり須和田公園から部活動を見ていたところを再会する偶然にも恵まれました。挨拶しかできませんでしたが、後輩た

ちを気にかけている先輩がとても印象的で、心に残っている出来事です。

私は目頃から感謝の気持ちで校歌を口ずさみ、同窓会総会には一度だけ出席できましたが、これからも都合のつく限り参加して、二中の校庭や体育館へ足を運べるようにしたいと思います。

クラス会は開かれていませんが、活動・再会で感涙にむせています……



知る人は知る第3の道。坂下から一気に階段状で上る通称「へび道」は、今も健在です。会報20号(2017)「スクールゾーン」より



—生活の傍らには卒業アルバム用にスタンドで撮った、部活動ごとの集合写真の一枚が飾ってある。頂戴したカラー写真は四十年以上が過ぎ、色彩を留めていない—

先輩方の鮮やかなラリーと、ピンポン玉の心地よく弾む音に魅了されて始めた卓球。墨で書かれたゼッケンの名を汗でにじませた先輩方が市内大会で苦杯を嘗める姿を見た日、男子一年生部員は決起した。真間卓球場や菅野卓球場・市川卓球センター・江戸川区スポーツセンターへ頻繁に通っての練習も重ねた。後に現役を退いた三年時にOB会が開かれた折、二学年上の元部長・高田先輩と対戦し、ゲームオールで敗れた。

「強くなったな、勝たせてくれてありがとう」

成長したことへのねぎらいの言葉が嬉しかった。二中七不思議? のひとつで、空から観ると西洋の棺に見えるという言い伝えのある体育館が悲鳴を上げ、昭和四十七年に新体育館建設があった。部活動は、Fさんや僕のクラス担任・大坂忠夫先生の取り計らいで、体育館横の二年一・二組の教室が放課後開放され、男女一台ずつの練習が可能になった。もしもこの時期を女子と集中的に練習していたら、最後に彼女たちを笑顔に出来なかつたらどうか、と今さら思う。

三年生になり体育館が竣工した。卓球部は男子の責任者を「部長」、女子の責任者を「副部长」としていた。Fさんは副部长になった。

昭和四十八年七月二十四日の市内大会初日、A(レギュラー)・

強烈に脳裏に焼きつく数々の感動。

大切な仲間・ハーモニー・宝物

40期 大作 美由紀

私ども四十期生は平成元(一九八九)年の卒業生です。あれから二十九年…

当時、無名であった我が市川二中吹奏楽部は、昭和の最後の夏(八八年)に千葉県吹奏楽コンクールの予選・本線を勝ち抜いて千葉県代表の四校に選ばれ、関東大会初出場ながら見事【金賞】を獲得しました。惜しくも【ダメ金】で全国大会には出場出来ませんでした。全国大会常連校である千葉市立土気中学校と我が市川二中の二校のみが【金賞】という快挙を成し遂げた輝かしい功績は、その後の私の人生で支柱となって行くほど大きな経験となりました。

顧問の太田隆道先生をはじめ部活の仲間たちとの絆、関東大会で金賞を獲得した際の感動、全国大会を逃した際の悔し涙、コンクールで演奏した課題曲「深層の祭」・自由曲「交響曲第三番オルガン・終楽章(サン・サーンズ)」、私たちの奏でるハーモニー、朝練、集団下校、夏合宿、停部期間中の江戸川河川敷での練習、胃潰瘍で血を吐いた部長職務(笑)。その全てが最高の思い出であり、全てが今でも胸を熱くさせ、涙が溢れる最高の宝物となっております。全てに感謝です。

私自身、太田先生・部活の仲間とも、ほぼ二十八年間ご無沙汰しております。そんな中、二〇一六年一月十六日、雪の降る寒い夜、息子の千葉県の私立高校受験真つただ中に、当時の副部長の緒方氏より、約二十年ぶりの電話で、顧問の「太田隆

B(準レギュラー)団体二種目で優勝し、ダブルスは決勝で同士討ちの三種目制覇。翌日のシングルスは、仲間たちが準決勝からの同士討ちを目論みつつも回は進み、男女A・Bの決勝四試合は進行係を務める我が顧問・高橋和男先生のアナウンスで一斉に開始された。



卒業アルバム掲載写真('73年9月撮影)

気がつけば、さつきまで聞こえていた各校の応援合戦がなくなっていた。男子Aと女子A・Bが終了すると、会場の一中体育館は静かになった。僕はこの殺風景を前日に続いて体験した。

19-21、21-19(当時は21本3ゲーム制)で最終ゲームの前半をリードされていた。コートのも後ろへ転がったボールを拾いに行く、そこは無表情を装った二中のベンチ。ボールを受け取り次のラリーへ向かう刹那、

「クリモツちゃん、がんばって!」

座って静観している女子部員たちの中、”先輩に負けないで”と言っているかのような、鋭い視線を向けたFさんの落ち着いた声だった。眼が合った僕は無言でうなずいた。

—皆半袖姿でその日は眩しいほどに晴れていた。男子は優勝カップやトロフィーに賞状を携え、女子は二年生が唯一獲得したBシングルス準優勝の賞状一枚と共に二年生だけが写っている。「Fたちはどうした?」「来ない、つて…」「三年生女子は卒業アルバムの中に居なかった—

道先生の還暦・ご退職の祝賀会」の連絡を頂きました。息子が中三生のその年は、当時の私の中学時代とリンクして一年を通して太田先生の行方を追って必死にネット検索をしたり、仲間たちとの思い出を回想したり、当時の楽曲をYouTubeで聴いては涙を流したり、と。みんなに会いたい!!!!とこれほどにも思った年はなかったのです。そういう状況での緒方氏からの連絡に、震えと笑いが止まりませんでした。「やっとう部長と副部长に繋がった!! 美由紀ちゃんを探していたんだよ!!」と祝賀会を企画して下さっていた、同期の野口(旧姓大野)薫さんからその言葉を聞いた時には「遂に願いが叶った!!」と鳥肌が立ち涙も溢れました。

三月二十七日、市川グランドホテルにて「太田隆道先生の還暦・ご退職の祝賀会」が開催され、太田先生を囲んで、四十期の同期だけでなく四十一・四十二期の後輩たちとも久しぶりの歓談の時を過ごす事が出来ました。翌日三月二十八日のお誕生日で六十歳を迎える太田先生と、全員が四十代となった生徒の私たち。

”懐かしいな。大人になったな。あんな小さかった後輩が、パパになって立派になってる。可愛かった後輩の八木澤教司くんが、世界的に有名な作曲家になっている。「くん」なんて恐れ多い大先生となっている…二十八年、やっばり色々あったな!。と溜息が漏れました。そんな時、当時コンクールで演奏した際の音源が流されました。それを聴いた瞬間、私は封印していた二中の思い出にパツと光が当たり、胸が熱くなって一人で涙々で泣き崩れてしまいました。太田先生も傍に居た仲間たちも驚いていましたが、涙が溢れて、溢れ出て止まりませんでした。

私は、中学卒業を機に、六年間続けて来たクラリネットを不

本意ながらも封印し音楽の道から離れる事にしました。黙って全てを封印し、その事に触れる事を避けて四十三歳まで生きて来ました。しかし、この事で自分自身がどれほどまでに二中の大事な思い出と楽器と音楽と仲間たちを封印し、大切に心の深く奥底に仕舞い込んできたのか？…思い知り、自分でも驚きました。

今年、私も四十期生は四十四歳を迎えます。あれから二十九年。成人し、就職し・結婚し・親となり…。気づけば、我々も当時の私の年齢を追い越して成長し、子育ても終盤に差し掛かり。

”ああ、またクラリネットを吹きたいな、太田先生の指揮でOBみんなと合奏をしてみたいな♪”と、思う今日この頃です。楽器も新たに揃え、少し私「本気モード」です(笑)。

市川二中 素敵な思い出をありがとう☆

今から10年前、私は二中を卒業しました。同窓生の皆様と同様、母校に対する思い出はたくさんありますが、私にとっては吹奏楽部の思い出が特に印象深く、今の私の原点とも言える経験させて頂きました。

当時の吹奏楽部は顧問の太田隆道先生(現三中勤務)のもとで音楽にも精神的にも多くのことを学び練習を重ねていました。太田先生の音楽に対する姿勢は情熱的のもので、私たちは必死に先生の要求に応えようと休みも返上して頑張ったのを覚えています。当時学んだ音楽知識は専門家となった今の私から見ても非常にレベルの高いもので、現在の作曲家としての仕事にも大きく役立っているほどです。

又、生活態度(当時は小さな社会と呼んでいた)に対しても挨拶・服装・言葉使いなど大変徹底したもので、演奏する心構えも学ぶことができました。

当然、いろいろな悩みや壁にぶつかり、辛い経験もありましたが、それらを今に語り合える親友にも巡り会うことができました。当時の経験は文面では語りきれない

ほどたくさんありますが、これは私の音楽家としての原点であり、いまでも大きな励みとなっています。

こんな思いを持ちながら音楽活動をしてきた私は昨年、同窓会より校歌吹奏楽版の編曲依頼を頂きました。会長の桑村さんが「総会で在校生の吹奏楽と共に力いっぱい校歌を歌いたい」と笑顔でお話されるのを見て、10年ぶりに二中と関わることの喜びと重大なことを任せられたという責任感と胸が熱くなりました。なぜなら同窓生が二中に対する想いは年代や環境によつて多種多様ですが、校歌だけは一期生から新卒業生まで唯一共通するものだと考えただけです。私は同窓生の「校歌」という思い出を大切にすることを心がけ、二中に対する各々の想いを集約して五

紙織と向かい合いました。同窓会総会当日、懐かしい体育館で完成した吹奏楽版校歌を初演しました。演奏は同窓生全員の斉唱と在校生の吹奏楽部、華やかで迫力ある吹奏楽と共に、同窓生と歌声を聴くことができた。編曲者としては何よりの喜びを味わえました。今後も二中のお役に立てることを心から願っています。最後になりましたが今回校歌を編曲させて頂いたことが縁となり、7月より二中吹奏楽部の指導をさせて頂いています。生徒たちは現吹奏楽部顧問の鈴木宏先生のもとで楽しく音楽を学んでいます。吹奏楽部は8月の吹奏楽コンクールで金賞を受賞し、県本選会に出場。そして12年ぶりに関東大会に出場することが決定しました。私が中学一年生で体験した関東大会出場感動を、在校生たちによって再び味わわせて頂きました。二中に足を運ぶ度に懐かしさと忘れかけていた思い出が次々と回想されます。

このような体験をさせて頂いた同窓会に深く感謝申し上げます。共々今後のご発展を心からお祈りします。(作曲家)

吹奏楽部の思い出と校歌編曲の試み

42期 八木澤 教司

会報3号(2000)「学校との交流」より

会報19号(2016)「太田隆道先生ご定年祝賀会報告」より



二中の思い出

51期 孫 逸舒

中学時代の思い出は、しとしと雨に濡れたアジサイの色をしている。

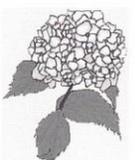
入学した当時、私はまだ日本に来て一年未満で、日本語はほとんど話せなかった。優しい女の子がひとり、なにかと一緒にいてくれたが、会話もできず、朝から晩までただただ寂しかった。文化つまり価値観の違いで、部活の先輩に睨まれたり、いじめっぽいものにあつたりもした。真間川に沿った長い通学路を歩きながら、空を見て、人家の庭先に咲くバラを数えて、空想の帝国をいくつもいくつも築き上げるのが、一番気楽な時間だった。

そうしながらも、だんだん本が読めるようになって、図書室の本を片っ端から読み始めた。六十%ぐらいの言葉が分かれれば、読書を楽しめることに気づいて狂喜した。「大草原の小さな家」シリーズ、『千一夜物語』『アンデルセン全集』『ソフィーの世界』『赤毛のアン』シリーズ、『海底二万マイル』『ピーターラビット』シリーズ：おかげで入学時の作文がひどすぎてひとりだけ居残りを食らった私は、三年生の時に、弁論大会の学年代表として、全校生徒の前で自分の文章を読み上げるほど、日本語が上達した。同時に、三年生になって日本の女子との付き合い方など、文化的にも馴染んで、休み時間もグループ活動も苦痛ではなくなった。

高校に入ってから、疎外感も孤独も全く感じられなくなり、学年の人気者で、親友も何人かできた。成績は常に学年トップで、その後一般受験で現役でお茶の水女子大学に入ることができた。

きた。

高校は毎日がとても楽しかったが、今思えばそれらも、時代の痛みの多い人間関係での試行錯誤と、孤独ゆえの読書のおかげ。ただでさえ難しい時期である思春期を、言葉もうまく通じない異国で過ごした二中時代、部活で上下関係を叩き込まれ、いじめと戦ったりいじめを目標とした二中時代、親切な友人と先輩、先生に助けられても自分にとってそれがどんなに救いになったか、伝えることもできなかった不器用な二中時代：一時期は大嫌いで思い出も全て真っ黒と思っていたが、今ではイモムシが蝶になる前のサナギの時期だったことがよく分かる。泣いて帰った思い出も、百点をとった思い出も、中国の悪口を言った男子の机を、朝の会で「バン！」と叩いたのも、吹奏楽部でみんなで曲をあわせた時の感動(私はコントラバス)も、全て人生の梅雨に咲く切なくて美しい思い出。



同窓会ホームページがオープン!!



二中同窓会のホームページが平成24年10月1日にオープンしました。

ホームページは、「トップ」「同窓会の行事」「組織と沿革」「同窓会の運営」「交流広場」「母校」などのページがあります。

トップページは、同窓会会長、二中校長の挨拶、同期会開催のお知らせなどが掲載されています。同窓会の行事のページには同窓会の年間活動の報告と予定が、また、交流広場には同期会の報告などが載っています。

二中同窓会ホームページのURLは、「http://www.2chudousoukai.jp」ですが、「Google」や「Yahoo」などから「市川二中同窓会」で検索すれば見る事が出来ます。また、母校市川二中のホームページと相互リンクしています。

♪村上正治・生誕100年記念コンサート♪に寄せて



昭和26年に「市川交響楽団」を創設された村上正治先生は、二中に昭和38年4月1日から昭和50年3月31日まで在籍され、校内合唱コンクールを始め校歌の愛唱を奨励されました。

村上先生の没後10年、生誕100年にあたる昨年7月6日に、千葉県と千葉交響楽団協会が主催する「記念コンサート」が、市川市文化会館で開催されました。

'14(H26)年6月29日 再発足第17回総会
開催

同窓会入会金を1,000円に改定した。これは「会費」を徴取していない同窓会として、会報の発行と送付に掛かる経費(例年100万円)を11会員あたり約100円)の一部として負担してもらったもの。

同窓会総会では再発足第1回総会以来、吹奏楽部の協力で吹奏楽演奏を行ってきた。第13回総会からは合唱部のコーラスが加わり、華やかさを演出してきた。第17回総会からは学校より推薦された生徒の留学体験や学習経験などの特別報告が加わり、文字通り卒業生と在校生の交歓の場が実現した。

この年より年号表示を「歴史的な流れを見やすくする」目的で、元号から西暦表記に変更した。

同窓会再発足20周年を目前に控え、20周年記念の取り組みを検討するプロジェクトチームを立ち上げた。

また、総会参加者を増やす取り組みの一環として「ホームカミングデー」(二二卒業後10・20・30・40年目を迎える同窓生は参加会費無料とする)を設け今日に至っている。

講演 川田弘(二期)「おもてなし社会を目指して」

2015年度・二中同窓会総会のご案内
※会費1,000円(学生500円)
該当期 26・36・46・56期(卒業後40・30・20・10年の期の方々)
ホームカミングデー(会費無料)

二中PTAバレーボール部 市川市大会V2達成(県大会3位)

二中PTAバレーボール部が市川市PTA連絡協議会主催のバレーボール大会に出場し、2014年度に続き2連覇を達成しました。また、市川市代表で出場した県大会で堂々の第3位を勝ち取りました。

千葉県PTAバレーボール大会



会報19号(2016)より

'15(H27)年6月28日 再発足第18回総会
開催

開催

(会長)斎藤康 副会長 鈴木尚賢・印出博美・安藤達夫・田中新一 会計:伊藤あい子・武井喜美子
右記以外の理事14名を選出 会計監査:松田恵子・加藤重夫

20周年記念事業の取り組みを本格的に開始。

講演 斎藤康(16期)「蓄音機への思い」
'16(H28)年6月19日 再発足第19回総会
開催

2016年11月より翌2017年10月までの1年間を同窓会再発足20周年記念の期間と定めて、記念事業に取り組みを確認し「記念総会チーム」(責任者:田中新一)、「記念誌作製チーム」(責任者:鈴木尚賢)、「母校への記念品検討チーム」(責任者:斎藤康)を発足させ、この取り組みのために「事業会計」(当座資金20万円)を新たに起こした。

また、会報とホームページもそれぞれ20周年記念の特集を組むなど、同窓会組織を挙げての取り組みが進められた。講演 中山裕一郎(16期)「アコーデオンで歌う日本の抒情歌」

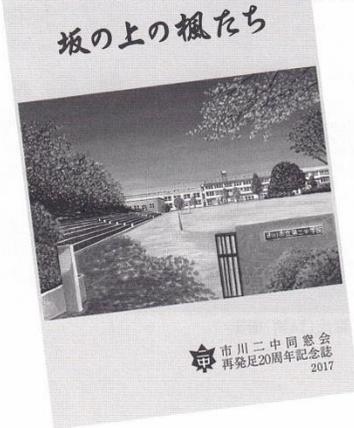
20周年記念誌『坂の上の楓たち』を発行します!!

会報19号で寄稿募集しました、同窓会再発足20周年企画の記念誌『坂の上の楓たち』が、6月25日の記念総会に合わせて発行となります。

歴代校長の中山廣璋先生、寺嶋捷夫先生、齋藤純先生、松永潤先生、大嶋章一先生、高鍋誠太郎先生と新校長の佐野典行先生が寄稿され、同窓生は以下に記した方々が投稿されました。本文は他に会報のバックナンバーの記事をピックアップして、母校や同窓会活動の歴史を振り返り、懐かしい写真等を織り交ぜてのA4判モノクロ60頁建てです。

- 1期：天野 睦子
『ハゲ山の上の新校舎と粗末な教科書とイケメン先生と』
開校当時の校舎・教科書と学校生活を鮮明に。多数の恩師と再会できた「傘寿の会」への感慨。
- 1期：岸田 弘
『一枚の年賀ハガキから(市川二中同窓会再発足物語)』
二中創立50周年をきっかけに、同窓会再発足につながる行動を起こした1期生の道程。
- 1期：桑村 益夫
『市川二中同窓会再発足20周年を迎えて』
同窓会設立当初から現在に至る流れを初代会長の目線で振り返り、感謝の言葉。
- 2期：森山 正義
『能勢一雄先生と囲碁』
在校時の教頭先生と20数年後に同じ職場となり、囲碁を通じて定年退職までの交流。
- 5期：中路 徐子
『母校の思い出』
居住するドイツ・ミュンヘンから一時帰国した数年前、元日に二中を訪れた際に甦った冬の記憶。
- 5期：三村 武教
『同窓会との絆』
同窓会活動に関わった経緯から第3代会長時に成し遂げてきたこと、活動の数々。
- 5期：本吉 健也
『心のふるさと』
3年間の学校生活を振り返り、リタイア後の今を関西の地から思い、綴る。
- 6期：井上 富美子
『二中時代の思い出』
英語、習字、理科、社会の授業から今でも記憶に残っていること、役立っていること。
- 6期：佐伯 美由
『暮れるまで裸足でドリブルしたっけ』
—女子籠球部の草分け時代—
二中女子バスケットボール部誕生時、「つるや」で購入した布地で、部員たち自らの手で作ったユニホーム。
- 6期：高久 明利
『僕の二中』
三年と五日の皆勤賞となった“ドンチャン”の遊び心が巻き起こす武勇伝。

- 14期：印出 博美
『二中時代のあんな事、こんな事』
団塊の世代ならではの学校生活の苦労や授業中の事故、さまざまな経験。
- 14期：栗生 明
(無題)
3年生の春、NHKラジオ「中学生の勉強室」英語科目に出演したが、予習せずに臨んだ失敗談。
- 14期：鈴木 尚賢
『同窓会? これでもいいのだ!』
黒子に徹する同窓会活動への強い思いとは裏腹な現実、それでも継続する意義と意志。
- 14期：吉田 陽子
『ゴーゴー大会』
高校受験目前、下校時間過ぎまで楽しんだクリスマス会に、学校一厳しいと言われた先生の反応は…
- 16期：安藤 達夫
『市川二中の思い出』
通学風景や学校風景、'64年東京五輪時(3年生)の生活風景を団塊の世代として振り返る。
- 16期：斎藤 康
『中三修学旅行日記』
在学中に記した修学旅行手帳からの転載。専用列車「ひので号」で、品川から8時間余りをかけての関西旅行記。
- 20期：深川 保典
『市川二中同窓会再発足20周年を迎えて』
卒業までの半年余りの二中生活にも拘らず、市議当時に同窓会活動に加わり、役員の人々に感じた「二中愛」。
- 21期：田中 澄子
『市川二中へ入学できての感謝・思い出』
恩師との出会いにより消極的だった性格を変えられた。卒業後度々訪れる二中周辺の思い出、ロザさむ校歌。
- 25期：栗本 拓彦
『カーペンターズがながれていたころ』
卒業アルバム用の写真から回顧する部活動の記録と一言の声援、その後に残った男女3年生部員の光と影。
- 40期：大作 美由紀
『強烈に脳裏に焼きつく数々の感動・大切な仲間・ハーモニー・宝物』
関東大会金賞に上り詰めた吹奏楽部の活動への思いと、恩師の定年祝賀会で当時の部員が集まった光景に感涙。
- 51期：孫 逸舒
『二中の思い出』
中学時代の思い出は、しとしと雨に濡れたアジサイの色…人生の梅雨に咲く切なくて美しい思い出。(本文より)



会報20号(2017)より



リオデジャネイロ・パラリンピック
車椅子バスケットボール・日本代表



先輩後輩

土子

大輔さん(47期)

—千葉ホークス所属—

会報20号(2017)「二中ニュース」より

★続報!!
今月、毎日新聞社・毎日小学生新聞・全国新聞教育研究協議会主催のコンクールにおいて「PTA広報の部」で佳作を受賞しました。

先生に聞いてきました

質問1 好きな有名人
質問2 宝くじで1億円当たったら何をしますか?
質問3 子供の頃の夢

新入会員(66期)への説明会(2015)



鈴木尚賢氏(14期)撮影

「二中PTA会報『二中』の第166号(7月発行)が、「市川市学校新聞展」において「最優秀賞」を受賞しました。2面(下)に掲載された「先生に聞いてきました」の内容と、レイアウトの斬新さに高評価を得たそうです。

17(H29)年6月25日
「同窓会再発足20周年記念」総会を「ヤマザキパン総合クリエイションセンター」内の「飯島藤十郎社主記念LCCホール」において開催した。

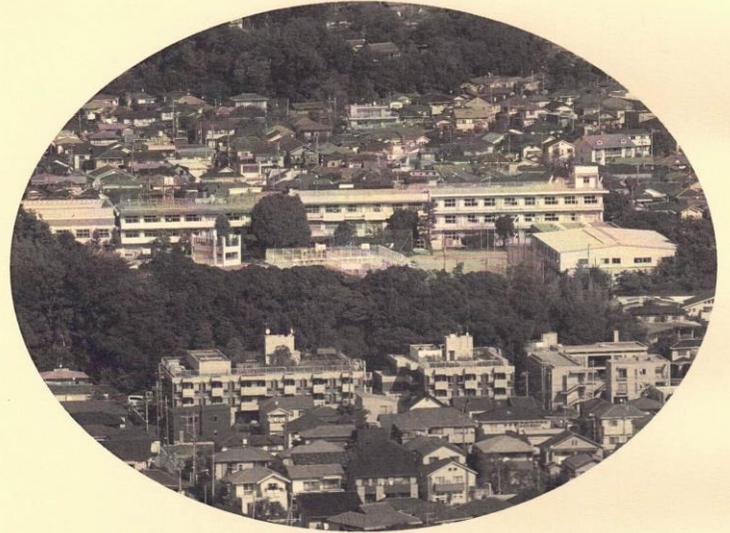
校歌

浜田佐賀衛作詞
平井保喜作曲

一 須和田が丘にそびえ立つ
わが学舎のはらからは
いにしえ人の由縁ある
真間の真名井の真清水の
浄く明るく直きを心に

二 聞けや名に負う鴻の台
松の緑のひとしおに
常盤の調べさやけきを
明け暮れここに勤しみて
いざ敏く分けむ文の林を

三 見よや都の曙に
紅映ゆる市川の
栄ゆく末を担い起ち
花咲き白う学園に
燃ゆる希望の若人われら



編集後記

一九九七年十一月一日、市川二中同窓会は再発足した。そして本年で二十周年を迎えることとなり二十周年の記念事業が検討され、その一環として本誌を作成することになった。これは、単に記念として思い出を記し偲ぶというところに止めず、再発足に関わった先人達の母校と同窓会にかけける熱き思いと実行力を改めて受け止め、今日の活動に活かすこれからは担う新たな道標になればとの願いを込めたものである。

すでに母校創立五十周年を記念して『市川二中五十年史』が刊行されており、戦後の時代から当時までの母校の歴史はここに詳しく描かれている。これを契機に再発足した同窓会の二十年を振り返ってそこに関わってきた多くの教職員や同窓生たちの思いを寄せあうことで同窓会の歴史を浮き上がらせればと、一方では記録の再生、また一方では生の寄稿・投稿を織り交ぜながらの編成とした。はたしてこうした思惑が成就できたか否かは不明であるが、少なくともそれに向かつて奮闘した編集委員をはじめ資料の提供や寄稿・投稿にご協力いただいた方々の熱い思いは十分に伝わるものと確信している。多くの同窓会員にこの小誌を見ていただき、引き続き同窓会の発展に寄与できればこの上ない喜びである。

最後に、本誌の編集・発行に公私の境なく惜しまずご協力下さった二中同窓生で中央光学工業の栗本拓彦氏に、厚く御礼申し上げます。
(編集委員長 鈴木尚賢)

坂の上の楓たち

市川二中同窓会再発足20周年記念誌

編集・発行 市川二中同窓会再発足20周年記念誌編集委員会
編集委員(卒業期順)
桑村益夫 井上富美子 印出博美 鈴木尚賢
安藤達夫 伊藤あい子 稲葉あや子 斎藤康
中山裕一郎 田中新一 栗本拓彦
発行日 二〇一七年六月二十五日
印刷・製本 中央光学工業株式会社